

序章 丸山から遠く離れて

ことばというものが、意味を持たなくなっていた。ことばは現実から乖離し、裏付けを失い、本心とは似ても似つかぬものになっていった。だれも人のことばを本気で信じなくなったから、うそ偽りを語っても良心が痛まなくなつた。

ユン・チアン 『ワイルド・スワン』 土屋京子訳

この日本列島に生きる人々が過去、どのようなことを考えてきたのか。とりわけ、政治についてどのようなことを考えてきたのか。筆者が専門とする日本政治思想史は、ごく大雑把に言えば、以上のような問いに答えようとする学問である。¹

それは、政治学の一分野である。「われわれの政治は今、どのような状態にあるのか」「われわれの政治は、今後、どのようなべきなのか」。こうした問いが政治学にとつて基本的な問いであるとすれば、例えば過去の政治学者の主張や命題や仮説を整理し、彼ら彼女らが用いる概念が、今もなお使用に耐えるか否かを検討するという作業は、政治学者たちが無用な混乱に陥らないためには必要な作業である。

そのような意味では、日本政治思想史は（その場合、必ずしも「日本」を冠する必要はなからうが）、最低限、政治学の補助学問としての地位を主張できるだろう。学説史は地味なようであり、大切なものである。

ただし、これまで（日本）政治思想史の名の下に生み出されてきた先行研究が、狭義の意味での政治学の学説史にとどまってきたというわけではない。そして、本書においてもそのような作業が遂行されているわけではない。そのことは本書の目次を一瞥しただけで明らかであろう。狭義の政治学者ではない人々の「思想」を本書は、多くの先行研究と同様に、問題にしている。

狭義の政治学の学説史——その必要性を否定する人は他の学問の場合と同様に少ないだろう——と（日本）政治思想史との間にあるこのズレは、ではなぜ生じるのだろうか。あるいは、そもそもこのようなズレは生じるべきではないという考え方もありえよう。その場合、筆者を含む日本政治思想史の研究者はこれまで少し野心的に過ぎ、自分たちが本来行う必要がない作業を遂行していたということになるだろう。

そうではない、ともちろん筆者は考えている。確かにこれまで（とりわけ斯学のファウンディング・ファザーたちは）野心的過ぎたのではないかもしれないと思うが、筆者を含む日本政治思想史の研究者が、必要な作業を行ってきたとは考えていない。それは確かに必要だったのだ。

なぜか。その理由の一つは、政治について考えているのは政治学者や政治家だけには限られないからであろう。また、政治学者より政治の方が古い（それもかなり）からであろう。職業的な政治学者が誕生するはるか以前に、さらに言えば大学で政治学が講じられるはるか以前から、政治はこの世界に存在した。政治に関する高度で抽象的な思弁の体系もまた存在したのである。この対象と、それを扱う学問の成立との時間的なラグ——さらには後述するように日本については概念の翻訳といういわば空間的なラグも考慮に入れな

ればならない——が、政治思想史が狭義の学説史にとどまることができな内在的な理由である。必ずしも職業的な政治学者ではなかったロックやマキャベツリを（筆者としては朱子や徂徠もと言いたい）扱わないのでは、政治に関する私たちの思考の営みの歴史はあまりに貧相なものになる。（日本）政治思想史家のほとんどは、そして政治学者の一部もそう考え続けてきた。

もちろん、異論はありえよう。貧相で何が悪いのか。（日本）政治思想史に「方法」はあるのか。方法を限定することは対象を限定することである。そして対象を限定することはしばしばつまらないことである。だが、学問とはある意味、そのようなつまらなさに耐えることではないのか（ついでに言えば、経済学や社会学はそうしたつまらなさに立派に耐えているではないか）。「豊饒さ」や「深み」といった言葉でお茶を濁すべきではない。何でも扱える、何でも言えるということは、何も扱えず、何も言えないということ実は同義なのではないか。²面白さと厳密さを天秤にかけるならば、面白さを捨てても厳密さを取るのが学者たるものの務めではないか。政治学なかでも（日本）政治思想史はしばしば学問的な厳密さを犠牲にして面白さに逃避してきたディレッタントの巣窟ではなかったのか、等々。³

耳に痛いところがある。本書も、方法的な厳密性に欠ける嫌いがあるのではないかと言われれば、胸を張って反論することは難しい。正直に言えば、私を含む政治思想史家の多くは、ただ面白いのである。対象の面白さ、豊かさ、奥深さに深く魅入られてしまっているのである。そして対象をより深く理解し、他の人にも伝えたいと思っているのである（本書がそれに成功していれば幸いである）。他方で、しかし、（日本）政治思想史に全く「方法」がないとは筆者は思わない。以下、少しこの点について述べたい。

(日本) 政治思想史家は、過去を扱うという点では、歴史学者である。「過去のある時点で、ある人物が、どこにいたか、何をしたか、それによって何を待たかあるいは失ったのか」という事実を明らかにしようとするのが歴史家の仕事であるとするならば、思想史家も「過去のある時点で、ある人物が、何を言ったか、それによってその人は何をしたのか」という事実を明らかにしようとする。その意味で、私たちの仕事は、仮説検証ではないのもちろんのこと、体系的ないし規範的な理論の構築でもない。そのほとんどが実は事実発見 (fact-finding) と、それら事実間の連関の記述 (description) なのである。

ここに言う「事実」を、「思想」と峻別された固いものと考える必要はない。前者のいわゆる「事実」も、その検証の手續きは、通常、文献資料の解釈を媒介して行われる以上、その厳密性の程度も実は「思想」の場合と、かけ離れているとは言えない³⁴。さらには、(時には経験的な「事実」に明らかに反した) フィクションでさえも、その意味では人々に経験された生の事実として、それが歴史の中で果たした機能を正確に記述することは可能であり、必要なことであろう(そしてこのフィクションにも、本書で後に見ることになるように、社会契約のような理論から、神話や明らかな偽史まで大きな幅がある)。

方法としての歴史という点から見れば、政治史と(日本)政治思想史との距離はとりわけ近い。政治史家が、政治家、官僚、軍人といった政治的アクターが何がしかの政治的目標に到達しようとする際に生じる競争の記述を試みるとき、そのアクターが有する政治的資源のうちで特に理念や言葉というものに着目するならば、その政治史家は政治思想史家とほとんど同様の作業をしていると言えよう。もちろん、(日本)政治思想史家は、政治家や官僚・軍人といったあからさまに政治的な人物よりは、彼ら彼女らがアクセス可能な武器や資源としての「思想」を製造・改造する主体としての学者や知識人の方に多くの注意を払うだろうが、

その差は所詮、程度の問題とも言えよう。⁽⁵⁾

ただし、両者の間には根本的な違いもある。(日本) 政治思想史に特徴的な点があるとすれば、それは前者においては分析の与件として前提に置かれる諸概念——国家や社会といった概念はちろんのこと、「政治」なる概念それ自体についても——を、分析の対象として俎上に載せ、歴史的变化の相の下に考察しようとする態度が顕著なことであろう。例えば、十八世紀の儒学者——彼らも疑いなくこの現世の秩序がどうあり、どうあるべきかを真剣に考えていた——と二十世紀の政治家や政治学者とは、「政治」「政事」「政」として捉えていた事象の範囲は、かなりの程度異なっている。「いかなるものが政治なのか」についての認識が、この間、相当に大きく変化したのである。そして、そのような変化それ自体をいわば「我ら失いし世界」(The World We have lost)として記述することは、政治史や政治学の将来にとっても価値のあることである、と(日本) 政治思想史家は考えているのである(この変化が不可逆的である保証はない。失地はいつの日にか回復されるかもしれないのだから)。

(日本) 政治思想史の方法はもちろん、歴史学だけに限られない。現存する秩序についての反省的な、またはありうべき秩序についての高度な思弁をその対象とする以上は、それは哲学や倫理学(あるいは宗教)と多くを共有せざるを得ない。

とりわけ、哲学、なかならず政治哲学は重要である。「政治とは何か」という問いに対して、「その答えは歴史的に変遷してきた」と応答するのは、究極的にはやはりある種の逃げであろう。⁽⁶⁾ その歴史の変遷を記述するに際しても、観察者ないし記述者の側に与件としてある「政治的なるもの」の標準が存在するはずであるし、そのようなものなしには観察も記述もそもそも不可能であろう。「歴史」の立場に徹することは、

往々にしてしかし、こうした意識せざる前提を吟味検討することを妨げてしまう。やはり（日本）政治思想史家にとって政治哲学は必要なのである。

また、そもそも過去のある「思想」を理解するということは、その「思想」をいわゆるブラックボックスに見立てて、それが果たした客観的な機能を記述するという作業に尽きるものではないだろう。やはり、箱の自身、その仕組みに習熟することが、さらにはそれを実際に用いた際に人間の心理に生じる現象を追体験することが必要であろう。

この点において、思想は酒のような嗜好性のある毒物によく似ている。例えば、ワインを摂取すると人体にどのような現象が生じるのか。アルコールがもたらす酩酊状態によつてどのような社会的帰結が生じうるのか。それらを理解し、それを記述することは有用であろう。だが、ワインの意味を理解し、それを他者に伝えることがこうした作業に尽きると考える人は多くはないだろう。酒一般について、そしてワインの品種のそれぞれ、あるいはそれを生み出す土壌や風土についての詳しい知識とともに、上手にその酩酊状態を楽しんで見せることが優れたワイン評論家の条件であろう。全くの下戸でも、完全な泥酔者でもなく、〈明晰さを維持した酩酊者〉のみがワインの味をその全き深みにおいて他者に伝えることができよう。そして、それはワインを嗜み愛する人々にはもちろん、全く酒を飲めない人々にとつても（人類の文化的経験の大きな部分を占める体験についての知識を提供するという点で）もしかしたら有用なことであろう。優れた（日本）思想史家は、先述した如くワインがもたらす酩酊状態を冷静に記述する医者に似ているとともに、〈酒の味が分かる〉ワイン評論家に似ている必要があるのである。

「酒の味が分かる」とは、この場合で言えば、過去の哲学者の著作について理解するには、やはり哲学の

素養（もつと言えばその気質）が、宗教家の著作について理解するには宗教の素養が、儒学者の著作についてはやはり儒学の素養が、ある程度必要不可欠であるということである。もちろん、酒と思想は同じではない。それは、深く理解することそれ自体が、対象に対する何らかの応答であることが思想史においてはまれではないからであろう。すぐれた思想史研究が、同時にある種の思想書として思想研究の対象にもなるというしばしば起こる事態は（本書がそのようであると主張する勇氣はさすがにないが）、このようにして可能になる。ワインの比喩を続ければ、究極的にはワインの生産者になる可能性が、政治思想史家にはあるということであろう。

さて、政治思想史の一分野である日本政治思想史について考えるにあたっては、翻訳の問題を逸するわけにはいかない。⁷ いままで、「哲学」や「宗教」という言葉を特に注釈なく用いてきた。だが、ここにも先ほど「政治」について考えたのと同じ問題があるのである。ある相当に高度な思弁の体系を内在的に理解し記述するに際して、「哲学」ないし「宗教」という、もともとは *philosophy* や *religion* といった西洋語に由来する翻訳語を用いることで、ある種の経路依存的なバイアスを抱え込んでしまうということはないだろうか。プラトンとアリストテレスの著作に付された一連の注釈として理解可能な哲学の伝統にとつて、そうした古典を共有しない世界に展開された思弁の体系は、どこまでも疑似・哲学にとどまるのではないか。⁹ 一連の預言者たちが残した啓典を共有しない人々によつて紡がれた彼岸についての深い思索は、どこまでも疑似・宗教にとどまるのではないか。¹⁰ しかしそれは、いわば鯨尺で作られた着物を、メートル法による物差しで測つて「おかしい、ずれている」と呟くようないささか滑稽な事態ではなからうか。¹¹

「西洋」を専ら扱う研究者が往々意識する必要のないこうした困難が、十九世紀後半に起きた「開国」の

過程において、ギリシヤ・ローマに由来する politics や philosophy をはじめとした語彙群が翻訳・継受され、さらにそれらが驚くべき速さで浸透し定着したという本邦の体験に由来することは疑いない。新たに流入した語彙と、それ以前から存在した語彙との間には様々な葛藤や緊張関係——その過程では、在来の語彙が「土着」的かつ「伝統」的なものとして表象されることも起こるだろう——が生じた。そしてそうした葛藤や緊張関係はその後の本邦の政治をめぐる思考の営みに特殊な刻印を与えた。

もちろん、これは本邦のみの特殊事例では恐らくない。歴史的偶然により、紀元前の polis と現代の state を混同していることにさえ時に気づかないほど、あきれるほどの持続性を有した語彙を用いて政治社会を構成する欧米社会はともかくも、それ以外の世界の大部分にとって「近代」とは、本邦がそうであったような語彙群の上書きの経験であったはずである。¹²¹³

本書所収の論文が主に明治・大正期を対象とするのは、以上のような筆者の有する問題関心の反映である。こうした過程を観察するのに、もっとも適したサンプルがこの時期に収集されると思うからである。したがって本書は n = 1 の事例研究であり、第一義的には明治・大正・昭和の日本社会の思想を適切に記述し深く理解することを目指しているが、それは比較に向けて開かれた事例研究である（能力の限界故に手が回らないが）¹⁴。

以上のような意味で、日本政治思想史は、（純粹な「方法」への再帰が潮流となりつつある昨今¹⁵いささか恥ずかしいのだが）学際的かつ境界的な学問なのである。¹⁶しかし、この方法論的なキメラ性は、その対象（政治、近代日本、アジア）に即したそれなりに合理的な要請があると筆者は考えている。